

MAT Exhibition vol.13

Bedtime for Democracy / Nagoya

ベッドタイム・フォー・デモクラシー／名古屋

2023.10.20 fri - 12.23 sat

Minatomachi POTLUCK BUILDING 3F: Exhibition Space

キュレーション | 川上幸之介

企画 | Minatomachi Art Table, Nagoya [MAT, Nagoya]

主催 | 港まちづくり協議会

協賛 | 株式会社クラビズ

設営 | ミラクルファクトリー (青木一将)

MAT, Nagoya

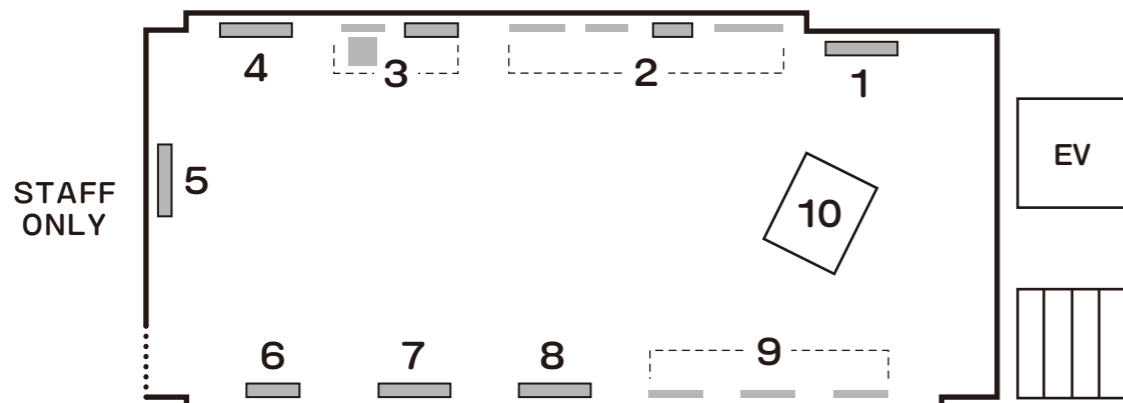
ディレクション | 青田真也、吉田有里

コーディネート | 山口麻加、大野高輝



鑑賞ガイド

- ・1F 受付で貴重品以外の手荷物をお預かりし、サコッシュとヘッドホン、キャプションマップをお渡しします。
- ・3F 会場入口にある丸椅子は会場内でご自由にご使用いただけます。
- ・会場内の映像作品は、モニター下部にある★型のイヤホンジャックにヘッドホンのプラグを挿してご視聴ください。(最大5名まで視聴可能です。) 他の鑑賞者の妨げにならないよう、慎重にイヤフォンジャックの抜き差しをお願いします。
- ・会場内の展示物には、お手を触れないでください。
- ・お帰りの際は1F 受付で手荷物を受け取り、サコッシュとヘッドホンを返却してください。
- ・物販については1F にてご購入いただけます。



1

ナオミ・クライン《ウォール街を占拠せよ / Speaks at Occupy Wall Street, 10 June 2011.》

2011年、シングルチャンネルビデオ、8分28秒

2008年の金融危機をきっかけとして、1%の富裕層と残り99%の人々との階級格差を表したスローガン「われわれは99%である」のもと、ウォール街から北200メートルに位置するズコッティ公園で「ウォール街を占拠せよ」は生まれました。この民衆の蜂起は同じ目的を共にしつつも、異なる政治的志向の民衆が集い、平等な合意形成(ゼネラル・アセンブリ)にもとづく水平的な運動を担保していました。同年10月には国際統一行動の呼びかけに対し、世界82カ国951都市が呼応しました。「ウォール街を占拠せよ」の最中、ズコッティ公園で民衆の前にナオミ・クラインは「人間マイク」(発言者が1フレーズ話すたびに周囲の者が反復して遠く伝えていく方法)により、現在にまで受け継がれてきた新自由主義が持つ歴史的な経緯と強欲性について糾弾しました。この実践の記録を捉えた同作は、民主主義の在り方について、新たな可能性を合唱します。

ナオミ・クライン | Naomi Klein

1970年生まれ。カナダのジャーナリスト、作家、活動家。トロント大学在学中に学生新聞の編集長を務めた。1999年に反グローバル化におけるマニフェスト『ブランドなんか、いらない』を発表する。2002年には『貧困と不正を生む資本主義を潰せ』、2007年『ショック・ドクトリン——惨事便乗型資本主義の正体を暴く』2014年『これがすべてを変える——資本主義 VS. 気候変動』ほか。

2

ブレッド & パペットシアター《Birdcatcher In Hell》

1971年、シングルチャンネルビデオ、25分02秒

戦後、アメリカとソ連のイデオロギー闘争は、ベトナム戦争へと代替され、200万人の死者を出し、アメリカの撤退にともない19年の悪夢に幕を下ろしました。戦時下の1968年3月16日、クアンガイ省ソントン県ソンミ村でアメリカ軍のウィリアム・カリー中尉率いる第1小隊が非武装かつ、無抵抗の村民504人(妊婦、乳幼児を含む子供)を次々と虐殺していきました。翌年、スケープゴートとして軍法会議にかけられたカリー中尉は、終身刑を宣告されます。しかし、リチャード・ニクソン大統領の政治的特赦により3年間の自宅軟禁の末、赦免されました。この虐殺と不公正をベースとしつつ日本の狂言を織り込んだ『Birdcatcher In Hell』は、軍楽隊のような一定のリズムで重々しく叩かれるドラム音を背景とし、赤黒く塗られた怪物たちが、虐殺と特赦の様子を演じていきます。同作では、超越された倫理、法の基準、感情の破裂が人形により形容され、狂気が剥き出しとなった例外状態を再演していきます。

ブレッド & パペットシアター《2022 カレンダー》

12枚組

2022年ブレッド&パペット・カレンダーの画像は、ピーター・シューマンが制作したベッドシーツ・ペインティング・シリーズからの抜粋であり、ボスニアの映画製作者でありブレッド&パペットの卒業生でもあるジャスミン・ジュバニッチの作品にインスパイアされたものです。

ブレッド & パペットシアター Grain Graphics《Thanks》

《World》《Courage》《Bread》

オフセット・プリント、4枚組、各431.8×279.4mm

ピーター・シューマンによるメゾナイトのオフセット・プリント。茶色の丈夫な紙に黒インクでオフセットで印刷されています。

「Thanks」という文字の下には手のひらから穀物が育っている様子が、「World」という文字の下に、開いた本のページから穀物が伸びていく様子が、「Courage」(勇気)という文字の下にはワークブーツから生える穀物のイメージが、「Bread」の文字の下にライ麦のイメージが、それぞれ描かれています。

ブレッド & パペットシアター《Cheap Art Manifestos》

オフセット・プリント、3枚組、各431.8×279.4mm

このポスター・セットには、ピーター・シューマンのチープ・アート宣言「なぜチープ・アートなのか」、「チープ・アートの10の目的」、「チープ・アートの重要性」の3点すべてが含まれています。これらは、Bread & Puppet Pressでデザインされたオリジナルの活版印刷テキストをオフセット印刷したもので、ピーター・シューマンによるメゾナイト・カットが施されています。

ブレッド & パペットシアター | Bread & Puppet Theater

1963年にピーター・シューマンによってニューヨークのローワー・イーストサイドで設立された、大小さまざまな人形を使って政治的な演劇を創り出すアメリカの劇団。ブレッド & パペットの特徴である人形は、1965年にニューヨークで行われた政治的なストリート・レードで初めて登場し、次第に反ベトナム戦争運動と結びついていった。1966年、シューマンは仮面劇『ファイヤー』を創作し、1968年のフランスのナンシーフェスティバルでセンセーションを起こし、同年、オビー賞を受賞した。主な劇に『キング・ストーリー』(1963年)、『クリスマス・ストーリー』(1963年)、『男は母に別れを告げる』(1967年)、『グレイ・レディ・カンタータ第1番』(1968年)、『肉を求める民衆の叫び』(1969年)などがある。1970年までにブレッド & パペットシアターは60以上の作品を制作し、国際的な評価を得た。また、会場ではパンを焼いて販売することで、日常生活と一体化した芸術活動を表現している。またピーター・シューマンの主な著書として『人形劇の過激さ』(1991年)、『今世紀末、人形とパフォーマンス・オブジェクトの状況はどうなるのか?』(1999年)がある。

3

松本俊夫《安保条約 / Anpojoyaku (The Japan-US Security Treaty)》

1959年、シングルチャンネルビデオ、17分48秒

1951年に調印され、翌年発行された日米安全保障条約(通称、安保条約)は現在まで続く対米従属をもたらし、日本はアメリカの極東の拠点として米ソ冷戦体制に組み込まれました。明滅と重苦しい効果音ではじまる本作は、条約へ反対する安保闘争が激化する一年前に日本労働組合総評議会により松本俊夫に発注された作品です。松本は、第二次世界大戦以降の日本の再軍備化へのプロパガンダや、安保闘争のルポルタージュといった表現に止まらず、写真によるストップモーションや、ニュース映画のモンタージュといった前衛芸術の手法を用い、新しいリアリズム映画を展開します。本作では、経済合理性の追求により、希薄化したコミュニティの連帯と相互の無関心といった、現在まで続く資本構造の矛盾を見出します。

* この作品には、一部暴力的なシーンが含まれています。時代背景を考慮し、オリジナルを上映しています。不安を感じる方は、ご鑑賞の際にご注意ください。

参考資料『全学連各派：学生運動事典』『全学連関係組織図』（* 初版本 付録）、双葉社、1969年

松本俊夫 | Toshio Matsumoto
1932年生まれ、2017年没。愛知県名古屋市出身の映画監督、映像作家、映画理論家。元日本映像学会会長。東京大学文学部美学 美術史学科卒業。新理研映画で記録映画『潜函』（1956年）を初演出、退社後「記録映画」「映画批評」等の雑誌で映画理論家として活動し、『安保条約』（1959年）、『西陣』（1961年）、『石の詩』（1963年）、等のドキュメンタリー映画を手がけた。1968年には『薔薇の葬列』で劇映画に進出し、『修羅』（1971年）、『十六歳の戦争』（1973年、公開は1976年）、そして夢野久作の同題探偵小説を映画化した『ドグラ・マグラ』（1988年）等の劇映画作品を監督した。一方、日本の前衛アート集団「実験工房」と取り組んだ『銀輪』（1956年）、また『メタスタシ ス＝新陳代謝』（1971年）、『アートマン』（1975年）、『気 Breathing』（1980年）、『偽装ディシミュレーション』（1992年）等で、日本の代表的な実験映画作家の一人とされた。著書に『映像の発見』、『映像の探求』（三一書房）、『幻視の美学』（フィルムアート社）他がある。

4

マーサ・ロスラー 《**Reads Vogue**》

1982年、シングルチャンネルビデオ、25分49秒

映画監督であり、活動家でもあるディー・ディー・ハレックによって1981年に「情報産業の神話を打ち砕く」というスローガンのもと、実験的かつ、メディア批判として「Paper Tiger Television」がニューヨークで設立されました。マーサ・ロスラー《Reads Vogue》は、このケーブルチャンネルでおこなわれたライブパフォーマンスです。化粧台に座ったロスラーは、ファッション雑誌「Vogue」のページをめくり、この雑誌の表象を巡る関係を「ヴォーグとは何か?ファッションとは何か?それは魅力、興奮、ロマンス、ドラマ、願い、夢、勝利、成功」と問いかけます。この朗読により、消費中心主義、メディアが内包する女性の身体への欲望、労働の暗部、余暇と消費を巡る問題が明らかになされ、埋め込まれた記号が解体されていきます。

マーサ・ロスラー | Martha Rosler
1943年生まれ。アメリカのアーティスト。写真、フォト・テキスト、ビデオ、インスタレーション、彫刻、パフォーマンスと幅広いメディアを扱うコンセプチュアル・アーティストであり、芸術や文化についての執筆活動も行っている。ロスラーの作品は日常生活や公共圏を中心に、ジェンダーへの眼差しを含み、メディアや戦争、住宅やホームレス、場と交通システムなど、環境へも向けられている。ドクメンタをはじめとして各国で開催される国際展に参加している。またドイツ・フランクフルトのシュテューデルン、カリフォルニア大学サンディエゴ校やアーバイン校などで客員教授を務めた。

5

リジー・ボーデン 《**Born in Flames.**》

1983年、シングルチャンネルビデオ、1時間20分32秒

平和的な社会主義革命である「社会民主主義解放戦争」から10年後という虚構のアメリカ合衆国を舞台に、女性たちによって組織された自衛軍は、革命において解消されることになかったジェンダー、人種、階級といった解放を、地下ラジオ局を拠点として体現していました。映像ではフィクション、ニュース、ドキュメンタリー、フェイクがカラー ジュされ、教条的な堅苦しさが避けられた曖昧な世界の中で展開されます。そこでは、女性たちの直接行動によるアイデンティティー形成を通して、現代における民主主義、さらには社会主義といった政治の有効性に疑念が投げかけられます。ボーデンは政治革命が深い効果をもつためには、メディアや芸術に

親密に関わる文化的な革命の必要性を説きます。

リジー・ボーデン | Lizzie Borden
1958年生まれ。アメリカ合衆国出身の映画監督、映画芸術科学アカデミー会員。11歳の時に1890年代のマサチューセッツ州で起きた二重殺人事件の被告人リジー・ボーデンから借用した。マサチューセッツ州のウェルズリー大学で美術を専攻したが、ジャン＝リュック・ゴダールの影響により映画監督を目指す。1976年に実験的なドキュメンタリー映画『Regrouping』、Art&Languageのメンバーでありバンド、Red Krayolaのメイヨ・トンプソンの曲からとられた1983年の『Born in Flames』、セックスワーカーの生活を描いた1986年の『Working Girls』を発表した。作品群は主に、人種、階級、権力、資本主義についてフェミニストの観点から描かれている。

6

ヌオタマ・ボドモ 《**Afronauts**》

2014年、シングルチャンネルビデオ、14分05秒

戦後の二極対立から生じた米ソ間の宇宙開発競争下、両国の月面着陸に先駆けようとした国がアフリカ南部にあるザンビアでした。ザンビアの小学校教師で国立科学・宇宙研究・哲学アカデミーの所長でもあったエドワード・ムカ・ンコロソは、1964年、12人のAfronautsと名付けた宇宙飛行士を、回転するドラム缶に入れて坂を転がしたり、タイヤのブランコで無重力空間を作りだすといった訓練を行いました。その中には17歳のマタ・ムワンバという少女がいました。ンコロソの計画は、銅とアルミのロケットでムワンバと猫2匹を月に送り込み、「原始的」な火星人へのキリスト教の布教活動を行い、ザンビアが「惑星空間の第7天国の管理者」になるという壮大なものでした。《Afronauts》は、この実際にあった物語をベースとしながらも、ザンビアの宇宙開発計画の物語をスペキュラティブ・フィクションとして描いた作品です。この組換えられた現実とフィクションの交錯するナラティブは、西洋社会が描いた映画の眼差しと民族誌が共に抱えてきた文化領域の植民地化に疑問を投げかけます。

ヌオタマ・ボドモ | Nuotama Bodomo
1988年生まれ。ヌオタマ・フランシス・ボドモは、ニューヨークを拠点に活動するガーナ人のアーティスト。幼少期には、ノルウェー や香港、カリフォルニアを転々として生活していた。ボドモは、2013年にガーナからアメリカに移民してきた一家が、乱暴な娘を祈禱し治療するため、ペンテコステ派の教会へと向かうロードトリップを描いた『Boneshaker』を制作し、サンダンス映画祭にノミネートされ監督デビュー。翌年には『Afronauts』が公開され、ホイットニー美術館で展示され、映画界とアートワールドで評価された。2016年に制作した『Everybody Dies!』では、サンダンス、ベルリナーレ、テルライド、ロッテルダム、SXSW、New Directors/New Filmsなどの映画祭で上映され、話題を呼んだ。現在は『Afronauts』の長編を製作中。

7

ヘイニー・スロール 《**The Hour of Liberation Has Arrived**》

1974年、シングルチャンネルビデオ、1時間04分33秒

1970年代初頭にオマーン、アラビア湾で当時最もよく歌われていた「The Hour of Liberation Has Struck」（解放の時が来た）から着想を得た《The Hour of Liberation Has Arrived》は、人民戦線による英米の植民地主義への闘争と解放を描いています。本作では、植民地の前哨基地から保護国へと移行しつつあった当時のレバノンの地政学的な歴史の揺らぎを、弁証法的なモンタージュ、記録映像、アーカイブ資料が辿っていきます。そこでは民族、部族、国民性によって必ずしも定義されない政治的問題に焦点が充てられます。本作では西洋中心主義の描く後進的なアラブ人の政治的、性的、文化的、経済的規範を覆し、日常

生活の実践における有機的な革命が開示されます。

ヘイニー・スロール | Heiny Srour
1945年生まれ。レバノンの出身でフランス在住の映画監督。ソルボンヌ大学社会人類学博士号取得。最初の作品『Bread of Our Mountains』を手掛けるが、レバノン内戦により消失。1974年にカンヌ国際映画祭でアラブ人女性監督として初めての映画『The Hour of Liberation Has Arrived』を発表した。その後もフェミニストかつ、社会主義的な観点から長短の映画を多数発表している。またロンドンインターナショナルフィルムスクール、ゴールドスミスカレッジで教鞭をとった。

8

レティシア・アグド 《**After The Revolution**》

2008年、シングルチャンネルビデオ、52分05秒

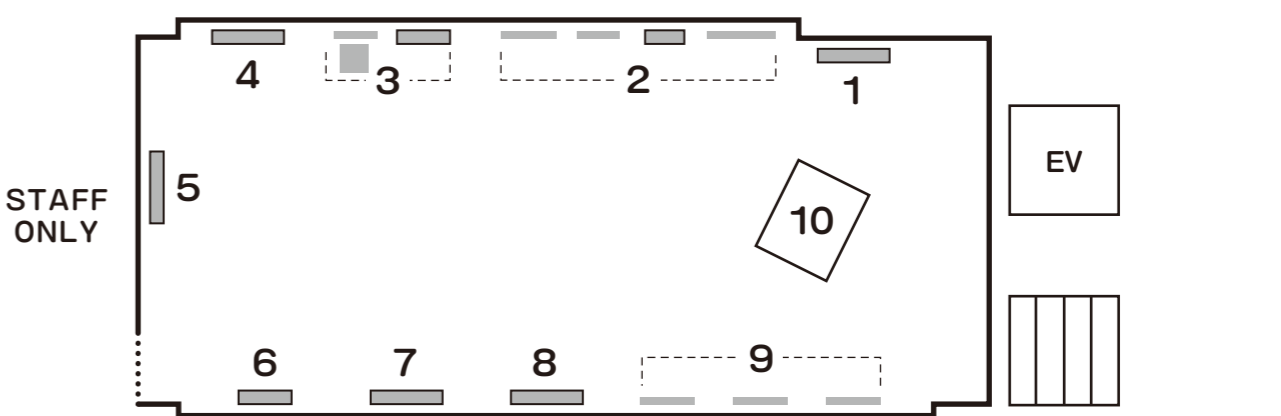
1994年1月1日、アメリカ、カナダ、メキシコ間の北米自由貿易協定（NAFTA）の発効と同時にメキシコ南部のチアパス州各地で武装蜂起した、マヤ系先住民主体の農民組織「サパティスタ民族解放軍」（EZLN）は、土地を奪われ、搾取されてきた非人道性に対して民主的な社会空間を取り戻すための蜂起でした。彼らは各コミュニティがそれぞれ自主的に活動を行う水平性のネットワークを形成し、先住民に対する構造的差別や政府の新自由主義政策を糾弾します。また、農民の生活水準の向上と民主化の推進について政府との交渉を繰り返しながら、現在に至っています。《After The Revolution》は、独自の教育、医療、法制度を構築してきたサパティスタの自治区で暮らすコミュニティ内の女性たちによって起こされた、台所や寝室での変化を描いています。革命以降の望むべき世界の主体は、どのように創造されていくのでしょうか。これまで生活空間を蹂躪してきた家父長制、性差別、ドメスティック・バイオレンスは、女性たちによるワークショップの、絶え間ない交渉と折衷により、瓦解し、コミュニティは新生へと向かいます。

レティシア・アグド | Leticia Agudo
アイルランドを拠点とするスペイン出身の映画監督。17歳で渡英し、演劇を学んだ後、ダブリンに移住し映画制作を学ぶ。『After the Revolution』で監督デビューの後、短編映画『Forty Foot』、南メキシコの労働者と先住民の権利をテーマにしたドキュメンタリー『Land of Amber』を発表し Simon Cumbers Media Fundを受賞する。2015年『Refuge』、現在はスクリーン・アイルランドの支援を受けて『My Refugee』を製作中である。またウォルバーハンプトン大学と共同で運営されている映画・テレビ制作のスクールの運営を行っている。

9

ウィンストン・スミス 《**Bedtime for Democracy**》

右 から《**Bedtime for Democracy**》《**Bedtime for Democracy**》《**Ray Gun**》



アメリカのパンクバンド、デッド・ケネディーズやグリーン・デイのアルバムカバーで知られるウィンストン・スミスの初期の作品は、イギリスでは発禁処分とされ、アメリカの宗教右派からも非難され、パンク・カルチャーだけに止まらない影響を世界中のサブカルチャーシーンに与えました。ウィンストンの作品は政治的な示唆に富むコラージュとイラストで知られ、ダダ、シュールレアリズムの系譜にありながら、ユーモア、パニック、カオスといった世界観で、現代社会を挑発する作品を展開しています。本展では、展覧会のタイトルに引用された1980年にパンク・ジン『FALLOUT』に掲載され、1983年に制作された《Bedtime for Democracy》にて世界的に認知されることとなった作品群が展示されます。

ウィンストン・スミス | Winston Smith
1952年生まれ。アメリカのアーティスト、イラストレーター、カバーデザイナー。アメリカのパンク・ロック・バンド、デッド・ケネディーズのロゴ、6枚のレコードジャケットのアートワークで知られている。またグリーン・デイのアルバム『インソムニアック』のジャケットやベン・ハーバー、ジョージ・カーリン、バーニング・プライズなど、50以上のアルバムカバーやアイコンをデザインしている。

10

ウェンディ・ブラウン 『**自由民主主義の終焉と新自由主義**』
[* カタログ『Bedtime for Democracy』（川上幸之介、2022年）に収録（pp.46-73）]

翻訳 | 大崎多恵、監訳 | 岡野八代

ウェンディ・ブラウン | Wendy Brown
1955年生まれ。アメリカの政治理論家。UPS 財団 高等社会科学研究所教授。主な著書に『いかにして民主主義は失われていくのか——新自由主義の見えざる攻撃』（中井亜佐子訳 みすず書房）、『寛容の帝国——現代リベラリズム批判』（向山恭一訳 法政大学出版局）、ほか。

『**Bedtime for Democracy**』**カタログ**（**川上幸之介、2022年**）
『**PUNK! The Revolution of Everyday Life**』**カタログ**・**最新版**（**川上幸之介、2023年**）

ご自由にご覧いただけます。
1F 受付にて、ご購入いただけます。